

「忘れられない日々に」

私には、これまで忘れられない日があいくつもあります。

ひとつ目は、まだ彼氏だった夫を初めて両親に紹介した日です。彼氏との面会に、母親は興奮して手を叩いて喜んでいたので忘れられません。また、結婚をすると両親に話をした際、「真面目な彼を悲しませることをしてはならないよ」と父親が私にたしなめた言葉は、今でも振り返ると大きな愛情だと感謝しています。

ふたつ目は、初めて授かった子どもを稽留流産のため手術することになった日のことです。不妊治療を始め、結婚 7 年目でようやく授かり、嬉しくて泣きながら夫に電話したこと。その後、成長が止まってしまったため手術をしなければならないといわれ、病院でいつまでも泣いてしまっていたこと。成長しないと分かっているけど、ずっと赤ちゃんにはお腹にいて欲しくて、病院に入る直前まで車で泣いていたこと。私が手術室に入るのと入れ違いで、出産後の赤ちゃんとお母さんが手術室から出てきて、ご家族と対面している姿。手術後は夫がぬいぐるみを持って病室に来てくれ、つきっきりで看病してくれて嬉しかったこと。赤ちゃんがいないのに、おっぱいだけはきちんと出て来たことが何とも言えず悲しかったこと…。この日々のことは決して忘れられません。ただ、治療自体で赤ちゃんを授かることはできませんでしたが、治療を行ってきたことは今でも全く後悔していません。そうでなければ、妊娠した喜びや、お腹の中に赤ちゃんがいるという「もぞもぞ」「びくびく」した感じを味わうことが出来なかったからです。

しかし、子ども好きで治療と仕事に邁進していた私も、いつの間にか自宅へ帰ると泣いてばかりいるようになりました。夫が「二人だけでも十分楽しいよ」と言ってくれることも素直には受け止められず、どうして良いものか分からなくなっていきました。一人っ子であった夫には、どうしても仲間を作ってあげたいと、私はずっと思っていたからです。

私はいつしか「養子縁組」という選択肢を考えるようになりました。小さい頃から、母親が恵まれない外国の子どもたちの支援をしていたり、姉妹が養護施設で仕事をしていることもあり、そのことは私自身の中では自然なことでしたが、夫は当初反対していました。ただ、夫は本当にこれ以上なく他人である私のことを妻として愛してくれていましたので「この人は血がつながっているかどうかで愛情を決める人でない」という、不思議ですが確信のようなものがあつたことは確かでした。

そして、なにより私の中で決定的だったのは私たち夫婦の年齢でした。赤ちゃんの頃から育てていくには遅くても 30 代後半でなければ体力的にも経済的にも難しいだろうと判断したからです。事実、児童相談所の方からは「まだ若いのに」と言われましたが、現実問題として 35 歳で申請したとしても実際委託される際には 40 代になっているかもしれず、私の中では決して早すぎることはないという気持ちは揺るぎないものでした。しかも、治

療しながら養子を待っていてもいいよ、と児童相談所の方が言ってくださったこともありがたいことでした。

しかし、私には一つの心配もありました。それは、私自身が仕事をしているということでした。児童相談所の方には、母親が仕事をいつでも辞められるという家庭の方が有利であるとハッキリ言われておりましたので、その点は不安がありました。実際に養子縁組をされる前から育児休暇がもらえるかどうか分かりません。かといって家計的には私が仕事をやめるわけにはいかず、しかし養子となれば最初のうちは通常よりもたくさんの愛情をかけなければならないことは理解していたため、頭が痛い問題でした。

「とりあえず説明を聞きに行こう」「とりあえず申請してみよう」「とりあえず里親登録してみたから、お話がきたら考えよう」という形で夫に渋々了承してもらい、手続きを進め 35 歳で里親登録を行いました。児童相談所の方は優しく話を聞いてくれ、私の希望も夫の反対も否定せず、辛抱強くいてくださったことを強く覚えています。

その後、1年半が過ぎるまで音沙汰はなく、私はその間に3人の子どもを授かりましたが、いずれも会うことはできませんでした。

そして、忘れられない日の三つ目は、初めて息子に会った日のことです。

当初、お父さんが不明であり、なおかつ外国籍の子もだと聞き、夫は「とんでもない！」と猛反対でした。私も正直なところ外国籍の子もが紹介されるとは思いませんでしたが、偶然にも国際的に、特にアジア圏の方々に温かく接してもらった経験のある私にとっては「そうなんだ」としか思わず、そのことで他の里親さん方が断ったことや夫が拒否をしていることが全く信じられませんでした。これほど国際化が叫ばれていても所詮は「総論賛成、各論反対」の他人事なんだと思い、とても悲しく憤りさえ感じました。赤ちゃんに会うこともせずに、夫は一度この話を断ってしまいました。

それからというもの、私はまた希望を失ってしまい、泣いてばかりいました。勝手に女の子だと思い込んで「きみつちゃん」という名前を付け、「素敵なお父さんがみつかりますように（でもそれがやっぱり私たちだと尚嬉しい）」と、見たこともない子どものために毎晩お祈りしていました。

その後、やはり里親が見つからないと、再度児童相談所の方より連絡が入りました。夫がこの時点で断ってしまうこともできたと思うのですが「妻に話をしてみます」と伝えてくれたことは、今でも感謝しています。そして、あの日、ついに「ひろせホーム」で赤ちゃんに会うことができました。お目目がぱっちりした色白の男の子が私たちを迎えてくれ、ホーム長の広瀬さんが早速抱っこをさせてくれました。不思議な事に、その赤ちゃんは夫と誕生日が 2 日しか違わず、目もと口元が夫に似ており、祖父と血液型が同じで運命のように感じられました。夫も何かを感じ取ったのか、あんなに反対していたのに、その場ですぐに委託をしたいと希望しました。実際に会ってみると「わが子のような」と嬉泣きをしながら息子に頬ずりをする夫を見て、私もこれまで半ば強引に不妊治療や里親登録などと夫を連れまわってしまったけれども、結果的に幸せになって本当に良かったと思い、そ

して血のつながりも国籍をも超えて、妻である私と子どもを受け入れ、愛せる夫を本当に尊敬しています。

「自分のできないことは受け入れ、出来ることを努力する」という考え方が、とても難しいことですが、私はとても好きです。私は今の所、自分で産むことができていません。でも、育てていくということを努力することはできます。本当に赤ちゃんとの運命を受け入れるのであれば、赤ちゃんの人生は「待ったなし」の状態であり、声がかかったそのタイミングを受け入れることも、私たちのできる努力の一つではないか、と実際に息子に会ってみてそう思いました。

その反面、私はとても恵まれています。まず、私自身が見識の広い環境で育つことができたのは、私の家族のおかげであると感謝しています。そして、職場からは委託を希望した2か月後から育児休暇を取ることができました。私が体を酷使しながら治療をし続けているのを、そして流産しては泣いて報告するのを、いつも親以上に心配してくれた上司が、忙しい現場にも関わらず組織に掛け合ってくれた結果でした。また、夫のご両親もまた、息子のことを快く歓迎してくれ、夫が赤ちゃんの時に着たという着物を持参してくれました。以前は反対していた私の父親も、そして兄弟たち家族も受け入れてくれています。そして、共働きで夫の反対があったにも関わらず、息子に合わせてくれた児童相談所の方。また、息子を生後すぐからこれまで愛情たっぷりに育ててくれ、また私たち夫婦をわが子のように大切にしてくださった「ひろせホーム」のご夫婦とお姉さん方。本当に感謝しています。ありがとうございます。

これから成長の過程でどんなことがあるか、楽しみでもあり心配でもあります。しかし、息子がおしっこをしたりうんちをしているだけで、私たちは幸せな気分になれるのです。ただ、そこにいるだけで本当に奇跡のようなことなのです。そのうち、夫の剣道の稽古を見に行ったり、動物園に行ったり、ただただぼーっと公園で過ごしたり、歌を歌ったり、一緒にやりたいことがたくさんあって…でもゆっくりと、ひとつずつ息子の興味のあることを見つけていければいいと思います。

そして、徐々に、息子には産んでくれたお母さんがいるということをお話していく予定です。でも、私たちは彼をいちばんに愛していて、いちばんの味方であり、その他にも応援してくれている人たちは大勢いるんだよ、ということを偏見なく伝えていきたいと思っています。

そのことを、彼が受け入れてくれることを願って、そして、彼のような子どもたちが普通に生きていかれる社会が訪れることを願ってやみません。

いろいろあったけれど、これまでのいろんな日々「ありがとう」と言いたいです。そして、これから新しい夫と息子との日々が始まります。